

1 不安と混迷の時代がやってくる

1.1 始まった未来

①2年半前に、近未来を予測した。その抜粋(フラグメンツ第2回)。

近未来は、わたしが生きてきた時代より確実に悪くなる。

新型感染症の流行、台風・地震・噴火の多発、異常気象の深刻化、食糧危機、扇動政治家の台頭、言論の抑圧など。

ディストピア(暗黒郷)が、口を広く開けて待っている。民主主義は試練に立っている。

②どうやらこの見通しは当たりそうである。

昨年は、コロナの変異・拡大、ウクライナ戦争、気候変動と、世界を揺るがす事態が立て続けに起きた。

騒然とした時代である。世界は激動し、民主主義は動搖する。何が起きてもおかしくない時代である。どこへ行くかも分からずに、時代は疾走する。われわれは歴史の節目にさしかかっている。

1.2 コロナ禍は続く

①昨年の秋にも友人知人の感染が続いたが、今年1月になって再び親しい人、身近な人、知り合いなどの感染が相次いだ。

東京の家族から「1日中救急車のサイレンが絶えない」と、不安そうな電話があった。

どうも実感は政府の発表とは違う。

②2月7日、コロナの死者が累計7万人を超えた。この1カ月で1万人増えた。

感染者数は減少傾向だといわれるが、死者数は高水準である。1月半ばには、過去最多の523人がなくなった。死者数の多さは異常。実際の感染者はもっと多いに違いない。

全数把握をしていないのだから、公表された感染者数があてにできないのは当然である。

③そう思っていたら、医師の倉持仁さんは、「現場の実感だが、実際の感染者数は（公表された）2倍以上いると思う」と語っておられた。

セルフチェックは抗原検査で行われているが、PCR検査と比べると感度は悪く50%位。

診断の段階で半数が見逃されている。治療を受けるまでのハードルが高く、医療にたどり着けない人々が多数いる（2023年1月20日。報道1930）。

④倉持さんは、また、「（政府は）検査も受診も投薬も抑制するという戦略をとってきた」という。以前指摘した通り、わたしも政府のやり方には根本的な疑問をもっていた。だが、それが「検査抑制、受診抑制、投薬抑制」という、明確な方針によるとは考えつかなかつた。いわれてみれば納得がいく話である。

⑤感染者数が公表数の2倍、3倍は決しておかしい数字ではない。とりあえずわたしは、公表数の3倍の感染者数がいると考えて自戒している。新規感染者が4万人と発表されたら、実際には12万人位と考える。こうして、「感染者数は減っている」などというニュースに惑わされて、つい警戒が緩むのに気をつけている

⑥西浦説に従えば、コロナはまだ第2ステージ（地域的流行期）にあり、とても収束したといえる状況ではない。その後はさらに、第3ステージ（人＆コロナ共棲期）に入る。コロナ禍は始まってからすでに3年。これから数年続き、終わるまで前後10年近く可能性が高い（コロナとわたしと日本人（22）2③参照）。

⑦コロナは、わたしが当初描いたような形では収束せず、社会の隅々まで定着する恐れが高い。そうなれば「国民皆感染」の悪夢が、現実のものとなる。それでも世間は、行動制限のない自由を謳歌し、「コロナを征服した」と受けとめるのだろうか？

1.3 ウクライナ戦争の深淵

①プーチンは、長期にわたってウクライナ侵略を準備していた。クリミア半島への侵略は、その序曲だった。西欧の政治家の多くは、その意図を見誤った。

今振り返ると、彼らは歴史と人間性への洞察が決定的に欠けていた。この世には「妄想性や反社会性の人格障害が一定数存在する」という、心理学の知見を見落としていた。

②社会にはサイコパス、パラノイア、ナルシストなど、「人格障害」と呼ばれる性格の著しく偏っている人々が一定数存在する（一説では15%）。彼らは、知能の顕著な欠陥はないが、脳の働きが平均人とは異なる。極度に疑い深い「妄想性人格障害」や、社会ルールに無頓着で罪悪感のない「反社会性人格障害」などがある（コトバンク「人格異常」の解説）。

彼らはしばしば国や社会のトップにつく。

③プーチンにとって、兵士は消耗品である。10万人、20万人の動員兵も捨て駒に過ぎない。自分の命は惜しいのに、平然と他人の命を犠牲にする。

④仮にプーチンが倒れたところで、ロシアがすぐに民主制になるわけではない。長い間続いたプーチン体制は、権益に群がる多くの集団を生み出した。それはトップをすげ替えただけでは簡単に崩壊しない。彼を支えた旧体制派の一部が、取って替わるだけである。

⑤プーチンの戦争があらわにしたものがある。それはヒトがヒトを殺す「同種殺し」のおぞましさである。

同種殺しはヒトだけが例外ではないが、かといって動物一般に見られるわけではない。歴史を通じて戦争が繰り返され、膨大な人命が失われた点で、ヒトの同種殺しは際立っている。

⑥ヒトという種の脳には、同種を殺戮することを絶対的に禁止する機能がないらしい。抑制機能はあるようだが、それも個人によって強弱がある。人間の脳はそのように作られている。それが人間の本性であり、人間社会の実態である。人間の業としかいいようがない。未来に希望を持つのは難しい。

1.4 気候変動はゆっくりやってくる

①かつてこの山里は、夏は涼しく、冬は温暖だった。黒潮のおかげである。流れが変わったのは数年前である。それ以来、夏は酷暑、冬は酷寒の時代がやってきた。黒潮に不可逆的な変化が生じているらしい。そうだとすれば、これから気候はますます厳しくなる。

②今年の2月に入り、1日の寒暖差がひどくなかった。書斎は午前中15度だが、昼間に日が

さすと 26 度になる。冬の日の温度差が 11 度。尋常ではない。

わが家は建てた当時としては珍しい「高気密・高断熱」で、一年を通し薄着で暮らせる快適な環境だった。それが今では様変わりである。一体どうなっているのか。

③10 年以上前、パース(オーストラリア西部)を訪れた。飛行機が着陸態勢に入ったときに、近くの丘陵から空高く火と煙が上がっているのが見えた。

「こんな近くに迫っているのに着陸して大丈夫か」と思ったが、クルーは「山火事はよくあること。大して珍しくない」という。

わたしには、凄まじい火と煙に見えたのだが、現地の人には見慣れた風景だった。「そういうものか」と思ったものの、わたしはずっと疑問に思っていた。

④その後、世界中で山火事はいっそうひどくなつた。この数年、オーストラリア、アメリカ、スペイン、トルコなどで史上最悪の山火事が起きている。

特に憂慮すべきは、アラスカやシベリアなどの北極圏で、かつてない森林火災が続き、北方林が消失していることである。

⑤「人間の時間軸」はせいぜい数年から十年だが、「自然の時間軸」は数十年、数百年と長い。人の感覚では、とても自然のゆっくりした変化を実感することができない。

あの時パースで懷いた疑問は、正しかつたのだ。あれは、世界レベルで森林火災が迫りくる予兆だったに違いない。

⑥山火事自体は、はるか昔から発生しており、気候変動との因果関係はなかった。

だが最近、温暖化がかつてない「高温、乾燥、強風」の三拍子を引き起こし、森林火災を助長していることが分かつてきた。

森林火災は、大量の温室効果ガスを発生し、それはさらに地球の温暖化を加速する。火災と気候変動は「負のスパイラル」の関係が生じている。

⑦しかし、問題はそれだけには留まらない。気候変動の根底には、人口爆発問題がある。過去 60 年に、地球人口は 30 億人から 80 億人に激増した。一説では、2058 年には 100 億人に達するともいう。地球にはとてもそれを支える資源はない。

経済拡大は現代人の脳に埋め込まれている。より豊かな生活を求めて経済発展を追求する限り、人口爆発問題を解決する妙案はない。気候変動の抑止は至難である。「持続可能な

地球」は風前の灯火である。

1.5 われわれは歴史の転換点に立っている

これらの事態は突然起きたわけではなく、それまで隠れていた問題が表面化したにすぎない。

それぞれの原因は根深く、その影響は広く深い。コロナは10年、ウクライナ戦争は数十年、気候変動は百年単位で動搖が続くだろう。古きよき時代は終わり、不安と混迷の時代がやってくる。果たして人類の未来に期待ができるか。われわれは歴史の転換点に立っている。

2 「異次元の金融緩和」前夜

①目を足元に戻そう。2010年頃から、円暴落本や日銀破綻本などが相次いで出版された。それを信じたわけではないが、素人目にも国債の乱発と財政規律の悪化は明らかだった。新規国債の発行額は50兆円を超えた。国債発行の歯止めが利かなくなっている。こんな政策を続けたら長い目で円の価値は下がる。円暴落がありえるシナリオの一つとして、うっすらと浮かび上がってきた。

黒田総裁が就任する前から、すでに新規国債の大量発行は深刻な懸念だった。

②わたしが恐れたのは、金融緩和に続く因果の連鎖である。

具体的な連鎖の流れは分らないが、円安・国債暴落・インフレが複合的に起こり、それはやがてハイパーインフレから日本経済崩壊への導火線になると感じた。

③わたしは、とめどない国債の発行はテールリスクを誘発しかねないと考えていた。テールリスクとは、「起きる確率は非常に低いが、起きれば巨大な損害をもたらすリスク」をいう。発生すればその被害は壊滅的である。

テールリスクは何がきっかけで起こり、何時やうてくるかを予想することができない。しかしリスクがあるなら、それに備えないわけにはいかない。一旦起きれば日常生活は破壊され、その影響は数十年にわたって続く。

④「マサカそんなことが起きる筈もない」。わたしが当時相談した身近の友人たちは、即座

に否定した。しかし、わたしは納得できなかった。

前例がある。昭和 21 年 2 月、日本は壊滅的な経験をしている。国家財政は破綻し、預金封鎖、新円の発行に続き、最大 90% の財産税が課せられた。

⑤わたしは「投資には絶対手を出さない」とずっと決めていた。貯金一本槍で、投資などは考えたこともなかった。

職業柄、金銭トラブルはご法度だった。万一、破産すれば、弁護士資格も失ってしまう。実際そういう仲間を何人も見てきた。

(注) バブルに踊らされた身近な仲間もあるいは破産し、あるいは払いきれない債務を負って 10 年、20 年と苦しんでいる。しかも、彼らは結構優秀な弁護士たちだった。自分はバブルがはじける前に売り抜けると、どこかに奢りがあったのだろう。だが、市場は一介の個人の思惑など歯牙にもかけない。それが市場である。投資はバクチである。

⑥このままではコツコツと貯めてきた虎の子の貯金が目減りする。銀行預金一辺倒ではリスクが大きい。高インフレ、さらにハイパーインフレの危険があるなら、身を守らなければならない。国の経済が破綻すれば、老後になって路頭に迷う。そんな余生はごめんである。場合によっては、投資に手を染めるのもやむを得ない。そう考えてわたしは初めてドルへの投資を考えた(『プロ弁護士の処世術』92 ページ以下)。

⑦まずドル預金口座を開くところから始め、銀行の勧めでこわごわドル建ての投資信託を買った。1 ドル = 90 円を切る円高だったので、あえて為替ヘッジをつけなかった。

ただし、この頃はまだはっきりと投資へ舵を切ったわけではなかった。

⑧以上が、黒田日銀総裁が登場する 2 年ほど前の、わたしの状況認識である。

経済の素人だから間違いはあるだろうが、専門家の意見を信じ自分の未来を他人に賭けるわけにいかない。わたしはわたしの意見に従う。直観に従う。だから、めったに後悔しない。

3 黒田日銀:失敗の軌跡

①こんな状況を背景に、2013 年、日銀トップに黒田総裁が就任し「異次元の金融緩和」第一弾を発表。「2% の物価上昇を 2 年程度で実現する」という。

総裁の得意満面のTV報道を見て、わたしは危惧を覚えた。本来なら忍び寄る日本経済の衰退にどう対処するのか、身の引き締まる思いの筈である。

②これはまるで「金融政策万能論」ではないか。金融政策ができるることは限られている。いくら金融を緩和したところで、簡単にバブル崩壊から続く経済低迷から抜け出せない。わたしは、総裁の軽さに強烈な違和感を持った。

③その後、経済関係の友人、知人に意見を聞き、銀行や証券会社の担当者に質問を繰り返したが、らちがあかない。さらに経済ニュースを追い、専門家の意見を調べた。
半生をかけた貯金を一举に失うかもしれない。片手間ではなく、時間をかけて本格的に調べた。既にガタついていた日本経済の没落に備えるには、個人としても「リスク管理」が必要だった。

④調査の結果、「異次元の金融緩和は、回復不能の財政規律の緩みをもたらす」と考えるに至った。一旦緩和を始めればそれが常態になり、多くの既得権益が生まれる。

人間は慣れる動物である。異次元の緩和が当たり前となって、正常に戻すには多くの抵抗勢力が生まれる。それは、バブル以来20年の失敗例から明らかだった。

この緩和策は麻薬である。やがて財政規律さえ失われるのではないか。

⑤日銀は「（金融を緩和して）物価が上がっても、適度なインフレで止める」というが、神でもないのにそんなことができるのか。一旦インフレになつたら簡単には止まらない。

適度なインフレで止めるなど、そんな虫のよい市場操作ができる筈がない。

財政が悪化する状況の下で、インフレに超円安が重なって、ハイパーインフレを誘発する可能性は捨てきれない。日銀は「出口のないトンネル」に入ったのだ。

⑥当時の安倍政権は、財政健全化より経済を吹かすことに熱心だから、「日銀はやがて国債を大量に買入れることを強いられる」とわたしは予想した。

人事権を政府が握っている以上、日銀は首根っこを押さえられている。日本のシステムの下では、日銀の独立性など絵に描いた餅である。

⑦そもそも、いくら金融緩和を強力に推し進めても、経済の再建を図るのは無理である。
当時、すでに国の財政規律は弛緩していた。案の定、政府は国債の大量発行に走り、日銀は

それを支えた。

異次元の金融緩和は一時的なカンフル剤だった。カンニングすれすれの方法だった。金融と財政の馴れ合いが、黒田緩和策の予想された結果だった。

⑧「2年をめどとしたデフレ脱却」は空手形に終わった。企業は内部留保を積み上げるが、賃金は上がらない。それでも緩和は延々と続き、奇策、ひほうさく 弥縫策が打ち出された。国のモラルは低下し、国債の乱発に歯止めが利かなくなった。ゾンビ企業は温存され、企業の改革意欲は失われた。こうして黒田緩和策は、財政モラルと経営モラルの低下をもたらした。

⑨わたしの美学からいうと、黒田総裁の地位への執着は見苦しいが、保身という点から見れば、総裁は政府とマスコミを相手にうまく立ち回った。

10年にわたって組織のトップに立ち、高給を稼ぎ（2021年は年収約3500万円）、それなりの名声と権威を維持したのだから。しかし、彼は個人の保身とメンツのために、国の金融政策を誤り、日本経済を疲弊させた。